



6月号

ひだまり

今月のエッセー

普段の光景



今年から住み慣れた故郷を離れ、学生の頃の様に電車通勤をする新生活がスタートしました。

そんなある日のこと。ちょうど池袋駅から電車に乗り、自宅へ戻る途中での出来事でした。乗っていた電車は準急電車
で急行に比べると停車駅が多く、乗り降りするお客さんの数も必然と多くなりま
す。そういうこともあって、電車内は非
常に込み合い、私は吊革に掴まるのが精
一杯な状態で大変窮屈な思いをしていま
した。

そんな状況が続く中、途中の駅から幼
い(幼稚園児くらい)子どもを抱いた

編集後記

六月は梅雨の時期です。

私が小学生の頃。もう二十年前の話
ですが、雨が降るぐずついた日に傘を
差し、アジサイを見ながら登校してい
たことを思い出します。

この時期、昔は涼しい印象がありま
したが、ここ近年は、その雨に加えて
気温の上昇。更に湿気も相まって、ま
さに気分が「晴れない」感じですよ。

「心頭滅却すれば火もまた涼し」と
はいいますが、蒸し風呂のような環境
でも果たしてそのようなことが言え
るのかどうか・・・。

年々上昇してきている気温から地
球の環境が気になる今日この頃です。

◆田中仁秀

発行 曹洞宗総合研究センター教化研修部門

〒一〇五・八五四四

東京都港区芝二・五・二曹洞宗宗務庁内

☎〇三・三四五四・六八四四

若いお母さんが乗って来ました。私は昔
から席を譲ることを何の躊躇もなくして
しまうタイプの人間でしたので「誰か席
を譲るよな」と思いながら、その様子
を見ておりました。

時間帯も帰宅ラッシュ時ということも
あり、私をはじめ、座っている人も立っ
ている人も共に疲労の表情が浮かんでい
ます。やはり、残念ながらすぐに席を譲
られる方は現れませんでした。

ところが駅を出発して、少し経った頃、
座っていた中年の女性が、まず、お母さ
んの持っている子どもの靴を、持ちやす
い様に彼女自身が持参していたビニール
袋に入れて渡してあげたのです。それか
ら、お連れの方と一緒にお母さんと子ど
もさんに席を譲っていました。

私はただ早く誰かが席を譲らないかと
やきもきしていたので、その光景に少な
からずショックを受けました。自分だっ
たら、単に席を譲るだけで、子どもの靴
のことを気にしなかったことでしょう。
席を譲るといふことだけに、こだわっ
ていたことが恥ずかしく思えた出来事
でした。

◆伊藤正法

「精進料理」 しょうじんりょうり

仏教のことば

皆さんはこの言葉を聞くとどんな
ものを思い浮かべるでしょうか？

おそらく、ゴマ豆腐や漬物など植
物性の食材を使った料理を連想する
方がほとんどだと思います。一般的
に精進料理といえば、肉や魚を使わ
ないなど、その食材ばかりが注目さ
れがちです。

しかし、実は禅の世界では「何を
食べるか」だけでなく、「どう食べる
か」をとっても大切にしています。食
材ばかりでなく、食事作法や食事に
対する心構えも重要であると考えて
いるのです。

私たちは、食事をしなければ生き

ていくことはできません。言い換え
れば、私たちは食材のいのちをいた
だくことで生かされているのです。
だからこそ、肉であろうが野菜であ
ろうが関係なく、目の前にある食事
にどう向き合うのか。その向きあう
心に重点が置かれるのです。

精進とは仏教の言葉で、雑念を払
って一心に励むことを意味します。

私たちの体の健康を支えてくれる食
材のいのちに感謝し、一口一口真摯
にいただく。精進料理とは、そうや
って「いのちと一心に向き合えてい
るのか」を私たちに問いかけてくる、
そんな言葉なのです。

◆竹村信彦



法のお話



三年度
国生徹雄くにきてつゆゆう

『すべては移りゆく』

祇園精舎の鐘の聲

諸行無常の響きあり

これは、『平家物語』の冒頭の一節です。ここに出てくる「諸行無常」という言葉、「諸行」とは、この世界の全ての事がらや現象であり、「無常」とは、移り変って少しもとどまらないこと、という意味。ところが、私たちはこの言葉を「人生の短さを憐む」というような、どこかセンチメンタルでマイナス的なものに捉えてしまいがちです。

「無常」を感情的に捉えようと、どうしても悲観的になりやすいのですが、そうしてしまうのもまた人間の性分なのでしょう。

私のたからも

『ぼろぼろのバットとグローブ』



私のたからもものは、写真に写っているぼろぼろに使い古されたバットとグローブです。

私が小学生の時、夕方になると父親がプロ野球のテレビ中継を見始め、私も一緒になって見るのが日課になっていました。

そして、いつしか「自分も野球がやりたい。プロ野球選手になって活躍するんだ！」と夢みるようになり、小学校四年生の時にリトルリーグ（野球教室）に通い始めました。

その時に買って貰ったバットとグローブが本当に嬉しかったことを今でも思い出します。野球を通して、楽しいことも辛いこともありました。擦り切れるまで使い続けたバットとグローブは私のたからものとなり、また青春の一ページとなりました。

実家に帰ると、今でもこのバットとグローブが玄関に置いてあり、見るたびに在りし日の思い出が蘇ってきます。

そんなたからものを見ると、つい誰かを誘いたくなります。「ちよつとキャッチボールに行かない？」と。◆田中仁秀たなかじんしゅう



先日、妻の祖父が亡くなり、一緒に葬儀に参列してきました。葬儀場に到着すると、そこには、家族や親戚の人たちが集まっていました。私は今回初めて会う人がたくさんいたので、妻と一緒に簡単に挨拶をしたのです。

その時の妻の様子は、「リョウちゃん、久しぶりだね。」と、何年かぶりに会った従弟とうれしうに近況を報告し合ったり、「アサヒちゃん、こんにちわ。」と、従弟の子どもの誕生を喜んだりしていました。

車で葬儀場に向かっていている時は悲しい表情をしていたのですが、その時は少し表情が明るくなったので、私はほっとしていました。

葬儀が終わり、祖父が眠るお棺の中にお花を手向け、いよいよ最期のお別れの時がやってきました。妻は涙を流しながら祖父に一言、「おじいちゃん、ありがとう。」と感謝の言葉をかけ、目を瞑り、手を合

わせていました。葬儀の帰り道、妻が私に言ったのです。

「お葬式って悲しいだけだと思っていたけど、悲しいだけじゃないんだね。」

「久しぶりに、パパになったリョウちゃんに会えたし、アサヒちゃんにも初めて会えて楽しかったから。」

「おじいちゃんがみんなを合わせてくれたんだね。」

それを聞いて、妻は亡くなった祖父の姿を見て、悲しんでいたけれど、同時に人の成長を見て、うれしい気持ちにもなっていたのかなと感じました。

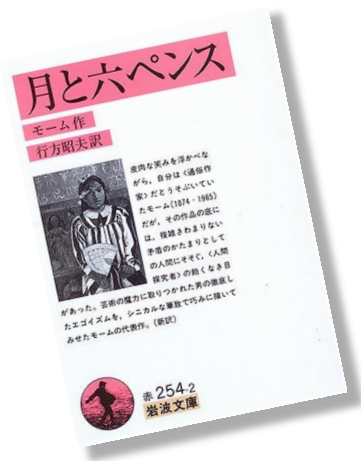
そして、もう一つ私を感じたこと。それは、祖父の死は移り変り（無常）ではあるけれども、従妹やその子どもの成長もまた移り変り（無常）なのだということです。

人の命に限らず、全てのことがらは日々移り変ってゆく。その真実を自分自身でしっかりと受け止めれば、私たちの一日一日、一瞬一瞬が尊く感じられるのではないのでしょうか？

むしろこの事象は過ぎ去るものである。怠ることなく修行を完成させなさい。」

お釈迦様も最期にこのような言葉を残されているのです。

ひだまり書房



『月と六ペンス』
著 W.S.モーム
訳 行方昭夫

画家ゴーギャンの生涯をモデルに、絵を描くために安定した生活を捨てたO・ストリックランドの生涯を、友人の「私」の視点で描いた小説です。主人公ストリックランドは証券マンで妻もいました。しかしある日、安定した生活を捨て、突如姿を消します。女と駆け落ちしたとの噂の真相を確かめるべく、ストリックランド婦人の依頼で「私」はパリに赴きますが、そこに女の姿はなく、貧しい生活をしながら、金のためでも他人に見せるためでもなく、ただひたすら絵を描くストリックランドがいました。

芸術創造の狂気―「月」と、ストリックランド婦人とその周辺に代表される世俗的因習・絆―「六ペンス」が対比されて描かれています。そこに自らの人生に於いて、世俗的価値に散々苦しめられ失望しつつも、しかし、その呪縛から解放を得たモームの人生哲学が表されています。

◆田代浩潤たしろこうじゆん